

# かたりべ 31

豊島区立郷土資料館だより

## たかが植木鉢、されど植木鉢

現在、郷土資料館では、来る八月六日（金）からの特別展「植木屋のある風景」開催に向けて準備を進めています（内容については五〜六頁参照）。その特別展事前調査の過程で、思いがけない資料群に出会いました。「う・え・き・ば・ち」です。



庭に積まれた《植木鉢・植木鉢・植木鉢》

田中家では、戦前まで植木リース業を中心に営んでいたためであろう、様々な種類の植木鉢が残されている。



転用植木鉢〈半胴甕〉

口径：155 器高：115  
底径：112（単位はmm）  
右写真の植木鉢群の中に埋もれていたもののひとつである。今回の特別展で展示する予定である。

上段右の写真は、駒込一丁目で盆栽業を営む田中さん宅の庭に積まれた、大量の植木鉢の様子です。この植木鉢群の中には、江戸時代に使われていたものもいくつか含まれていました。そこで興味をひくのは、転用植木鉢として使われたすり鉢・半胴甕の存在です。前者はいうまでもなく調理用具のスリパチであり、後者は口が広く腰の丸い形をした容器です。（写真左）。

いずれも、本来の機能を果たしたあとで底に穴があけられ、植木鉢として《第二の人生》を歩んだものといえましょう。

転用後の半胴甕には桜草が植えられていたようです。現在でも桜草の栽培家たちは、この鉢を珍重し、孫半土、あるいは半土鉢と呼んでいます。半土が半胴に通じることは間違いないでしょう。また、桜草の栽培を得意とし、「桜草培養法」を遺した染井の伊藤重兵衛家の発掘調査でも、半胴甕の土器片が多く出土しており、この鉢がもっぱら桜草栽培用植木鉢として使われていた可能性が高いことを示唆しています。

植木鉢を園芸用品としてではなく、資料として見た時、かつてこの地に集住していた植木屋たちの生活が浮かび上がってきます。それらを確実に集め、丁寧に繋ぎあわせ、再構成していくことこそ、資料館に課せられた役割といえるでしょう。特別展はまもなくです。（秋山）

# 特集 新館設立に向けてVI

## 「収蔵庫探検隊が行く」第4回

つつ、ついにこの日がやってきてしまいました。わが郷土資料館の収蔵庫をみなさまにご紹介しなければならぬ日が…。

前回まで三回にわたって、新宿区立新宿歴史博物館・葛飾区郷土と天文の博物館・杉並区立郷土博物館の各収蔵庫を探検し、各館で活躍する学芸員の生の声に接してきた我々探検隊は、今度は自らが勤務する当館の収蔵庫の現状を、ごくごく客観的に分析してみようということになりました。



ついに正体をあかした収蔵庫探検隊

新館設立特集最初の連続企画「収蔵庫探検隊が行く」シリーズの四回目は、お約束どおり豊島区立郷土資料館の収蔵庫を紹介いたします。記念すべき最終回を美しく締めくくるため(?)、以下、〈資料館不思議発見ノ〉形式できわめて真面目に進めていくことにしましょう。

「?」不思議「その一」

どう見ても狭い収蔵庫。果たしてこの中に郷土資料館の所蔵資料の全てを収蔵することができのだろうか？

◎収蔵庫の面積は約三七、二平方メートルしかなく、郷土資料館専用面積のたった六パーセントに過ぎません。また展示室とのバランスからいっても常設展示室・収蔵展示室の五分の一をはるかに下回る面積です。したがって、お察しの通り郷土資料館で収蔵管理している資料すべてを収納することは不可能な状況です。

そこで、止むを得ず、この収蔵庫の他に二カ所の収蔵スペース(区立の施設の一部)を確保し、やっとのことで収納しているのが現状ですが、当然、資料館外の収蔵スペースの保存環境は資料館内の収蔵庫(温度20℃ 湿度50%)より劣悪であり、雨風を凌げる程度の施設でしかありません。そのため、そこに収蔵できる資料も限られ、紙・布・漆器などの資料は置くことができません。したがって、系統的な資料の収蔵(用途による分類・寄贈者による分類など)



せま〜い収蔵庫

が不可能であるため、展示や他館からの借用依頼などの際には必要以上の手間と労力がかかる上に、資料自体にとっても決して好ましい環境とはいえません。しかしこれが現在の状況です。「博物館は生きものである」という言葉の通り、資料は毎年確実に増えていき、収蔵スペースがパンクするのも目前です。

## 「不思議」その二

資料館収蔵庫の真ん中に敷かれている二本のレールは、いったい何のためのもの？

◎資料の上げ下ろしの際に使用する電動式油圧リフトの軌道です。

絶望的に狭い収蔵庫をいかに効率的に利用するかという試みは、資料館設立当初からの課題であり、歴代学芸員と年々増加していく収蔵資料との戦いの歴史でもありました。

限られたスペースを有効に使うためには、収蔵庫を積層型にするしかない。しかし、当館の収蔵庫は積層型にすることさえも不可能なほど狭いのです。そこで考えられたのが壁面の重量ラック（物品棚）を天井高ぎりぎりの高さまでに設置するという方法でした。



収蔵庫にある謎のレール

収蔵庫の天井まで約四メートル強。その高さ

から資料の移動をするときに威力を発揮するのがこの電動式油圧リフトです。これがあるのではないのとは資料搬入の効率がまったく違います。かつて収蔵庫内に資料が溢れ、使用不能に陥った時期もありましたが、現在は収蔵庫の動脈としてめざましい活躍をしています。

## 「不思議」その三

独立した空調システムを持たず、また排気ダクトのない収蔵庫の資料を、どのようにして燻蒸しているのか？

◎博物館収蔵庫というのは、燻蒸作業の効率と効果を考えて、空調システムや排気システムを独立させ、また収蔵庫自体に密閉性が保たれ、燻蒸ガスの注入・排気が安全に行なわれるように設計されるのが一般的な姿です。

しかし、複合施設の一つのフロアに設置された当館では、そのような一般的な収蔵庫を設けることができませんでした。そこで、当館では毎回燻蒸のたびに、展示室を閉鎖、展示資料を撤収し、収蔵庫の資料を全て展示室に搬出し、積み上げて、ビニールシートで密閉して燻蒸する方法を採っているのです。また、資料館収蔵庫以外の収蔵スペースのうち、その場所では燻蒸作業を行なえない場所もあるので、そこに置いてある資料も資料館に運んで、収蔵庫



毎年恒例の燻蒸作業のようす

の資料と一緒に燻蒸しています。

これら、燻蒸にともなう資料の搬入・搬出の作業は膨大な労力を必要とし、学芸員はじめ、資料館職員は体力を著しく消耗するばかりでなく、その他の資料館業務が、この期間一切停止してしまうという弊害を伴っています。

しかしながら、資料の燻蒸は博物館の資料保存措置として重要なものであるため、保存環境自体が必ずしも十分とはいえない当館では、博物館としての使命を全うするために欠かすことのできない「年中行事」なのです。

## 当館収蔵庫の課題

ここまでみてきたように、当館の収蔵庫は狭いうえに設備的にも問題があり、その影響が資料収集など館の根幹に関わる事業面にも及んでいることは否めません。例えば、収蔵庫面積が狭いゆえに、区内諸家からの資料寄贈・寄託申

請に充分応えられず、受入れ資料を制限せざるを得ない場合も経験しています。さて、左の表は東京23区（プラス府中市）における、おもな公立博物館の展示・収蔵庫・延床それぞれの面積、およびその割合を一覧にしたものです。博物館学の専門書を繙くと、多くの場合「収蔵庫面積は展示面積の五倍は必要である」と、説かれています。しかし現実には、展示室の方がはるかに広いというのが実情のようです。やはり、来館者にとつてあまりなじみのない収蔵スペースよりも、展示室や講座室など親しみやすいスペースを充実させることが優先されているということでしょうか。

博物館活動が展開できるとなると思われます。「資料を収集したくても収蔵庫が狭すぎて集められない。十分な保存環境が整わない」ということになると、特別展示や企画展示でさえも、粗末で陳腐なものになってしまいがちです。まさにこの点こそ、多くの博物館が抱える大きな問題の一つとなっています。そうしたなかで、前回訪れた杉並区立郷土博物館では、延床面積に対して収蔵庫の占める割合が展示面積と同率の三三%であり、注目されます。それに対して、当館の場合は、延床面積六三三㎡（一〇〇%）に対して、収蔵庫の占める割合が三七㎡（六%）であり、実数・比率ともに他の館とは比べものにならないほど群を抜いて狭いことが一目瞭然です。

順位	自治体博物館 区市名	展示		収蔵		延面積		展示	延床面積	収蔵
		面積	%	面積	%	面積	%			
①	府中 S62	1900	31	860	14	6200	100	①	①	①
②	深川 S61	1344	26	336	6	5237	100	②	②	②
③	葛飾 H 3	1161	23	346	7	4993	100	③	③	⑤
④	新宿 H 1	903	23	414	11	3845	100	④	④	⑦
⑤	足立 S61	703	27	565	22	2562	100	⑤	⑤	⑨
⑥	品川 S60	317	13	277	11	2426	100	⑥	⑥	④
⑦	中野 H 1	504	22	532	23	2300	100	⑦	⑦	③
⑧	世田谷 S39	496	23	282	13	2133	100	⑧	⑧	②
⑨	大田 S54	464	22	449	21	2092	100	⑨	⑨	⑧
⑩	杉並 H 1	693	33	695	33	2075	100	⑩	⑩	⑥
⑪	文京 H 3	523	32	273	17	1648	100	⑪	⑪	⑪
⑫	板橋 H 1	444	33	242	18	1355	100	⑫	⑫	⑬
⑬	下町 S55	524	49	267	25	1071	100	⑬	⑬	⑬
⑭	豊島 S59	247	39	37	6	633	100	⑭	⑭	⑭
23区平均		647	26	391	16	2485	100			
23区平均+府中市		743	27	457	16	2771	100			
備考	公立基準 S48	850	43	850	43	2000	100			
	モデル案	800	27	667	22	3000	100			
	函館市 S41	998	40	290	12	2520	100			
	平塚市 S51	1529	39	469	12	3927	100			
	九州博 S49	759	17	1174	26	4500	100			
	秋田県 S50	2350	25	1590	17	9508	100			

※ 収蔵スペースの為の別棟があるかどうかは不明

『座談会』豊島区立郷土資料館新館設立に向けて」（『生活と文化』第7号 1993年）所収図版（朝倉雅彦氏作成）を転載。

## 展示と収蔵スペースの割合

順位	自治体博物館 区市名	展示		収蔵		延面積		展示	延床面積	収蔵
		面積	%	面積	%	面積	%			
①	府中 S62	1900	31	860	14	6200	100	①	①	①
②	深川 S61	1344	26	336	6	5237	100	②	②	②
③	葛飾 H 3	1161	23	346	7	4993	100	③	③	⑤
④	新宿 H 1	903	23	414	11	3845	100	④	④	⑦
⑤	足立 S61	703	27	565	22	2562	100	⑤	⑤	⑨
⑥	品川 S60	317	13	277	11	2426	100	⑥	⑥	④
⑦	中野 H 1	504	22	532	23	2300	100	⑦	⑦	③
⑧	世田谷 S39	496	23	282	13	2133	100	⑧	⑧	②
⑨	大田 S54	464	22	449	21	2092	100	⑨	⑨	⑧
⑩	杉並 H 1	693	33	695	33	2075	100	⑩	⑩	⑥
⑪	文京 H 3	523	32	273	17	1648	100	⑪	⑪	⑪
⑫	板橋 H 1	444	33	242	18	1355	100	⑫	⑫	⑬
⑬	下町 S55	524	49	267	25	1071	100	⑬	⑬	⑬
⑭	豊島 S59	247	39	37	6	633	100	⑭	⑭	⑭
23区平均		647	26	391	16	2485	100			
23区平均+府中市		743	27	457	16	2771	100			
備考	公立基準 S48	850	43	850	43	2000	100			
	モデル案	800	27	667	22	3000	100			
	函館市 S41	998	40	290	12	2520	100			
	平塚市 S51	1529	39	469	12	3927	100			
	九州博 S49	759	17	1174	26	4500	100			
	秋田県 S50	2350	25	1590	17	9508	100			

しかし、展示室に展示されている資料だけでは、博物館活動を展開していく上でどうしても不十分なものになってしまっています。展示資料の他に、その博物館がテーマとしている題材に直接的、あるいは間接的に関連している資料がバックボーンとして存在しているこそ、地域住民と有機的に結びついた立体的な

決して我々は現状に絶望し、悲観的になっていくわけではありません。むしろ、現段階のうち今号まで四回シリーズで取り上げた収蔵庫問題をはじめ、さまざまな観点から地域博物館のあり方を見つめ直し、新館建築の際に役立てていこうと考えています。

「収蔵庫探検隊」は今回をもって解散となりますが、「ふつうの男の子（おじさん）」に戻ることなく、取材を続けていくつもりです。これからの、ご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

（伊藤・秋山）

# 一九九三年度特別展

## 植木屋のある風景

— 園芸都市の地域像をさぐる —

八月六日(金)より開催

郷土資料館では、来る八月六日(金)から

一〇月三日(日)までの会期中、特別展「植木屋のある風景——園芸都市の地域像をさぐる——」を開催いたします。このコーナーでは、「八月六日までとても待ちきれない！」というわがままな読者の皆様だけに、展示内容についてソツとお教えることにしましょう。

豊島区の駒込・巣鴨地域は、江戸時代から大正時代にかけて植木屋の集住地帯であり、彼らは植物栽培のために趣向を凝らした庭園をつくりました。そして、花盛りの季節には、花見遊覧の名所として江戸市中から多くの見物客を迎えました。こうした花見遊覧の場面は、多くの浮世絵に描写されています(下写真参照)。当時の植木屋は、いわば《小さな植物園》だったのです。

江戸近隣の植木屋は、植物を栽培・展示・管理・販売することはもちろん、各品種によって微妙に異なる形をスケッチしたり、品種改良の研究をして、その成果を本にまとめたりもしました。つまり、彼らは植物栽培家であることも

に植物研究者でもあったのです。

かつての駒込・巣鴨地域は、大都市江戸をとりまく周縁都市としての性格と、農村の性格が融合したいわば「園芸都市」でした。しかし、この地に都市化・宅地化の波が押し寄せる二〇世紀を迎えると、こうした植木屋たちの多くが廃業や移転により次第に消えていきました。

今回の特別展では、植木屋たちの活躍の姿をさまざまな手法を用いて紹介することはもちろん、かつての「園芸都市」がいかに変貌を遂げたのか、という問題についても考えていきたいと思えます。



染井之植木屋 (絵本江戸桜)

### I 江戸の花名所

江戸市中で生活する人々が、手軽な娯楽として訪れた花名所を、錦絵(広重画『江戸名勝図会』など)や地誌類(『江戸名所図会』、『江戸名所花暦』)の挿絵などによって紹介し、現況写真と対比していきます。



染井<江戸名勝図会> 館蔵

### II 植木屋のすがたと技

江戸時代・明治時代にかけての植木屋の仕事内容を、古典籍類(『草木錦葉集』・『江戸名所図会』)や、そこに描かれた挿絵(『菊花壇養種』)などから考察していきます。

### III 駒込・巣鴨の植木屋たち

巣鴨の中山道沿い、および駒込の染井通り沿いに集住していた植木屋の活躍ぶりを各家に代々残された諸資料(『菊苗納箱』・伊藤重兵衛著『桜草培養法』・染付植木鉢・昔の景観写真・植木屋金太著『草木奇品家雅見』)を中心に紹介していきます。



きくみけんぶつちかみちひとりあんび 東京都公文書館提供

#### IV 「染井の野夫」伊藤伊兵衛

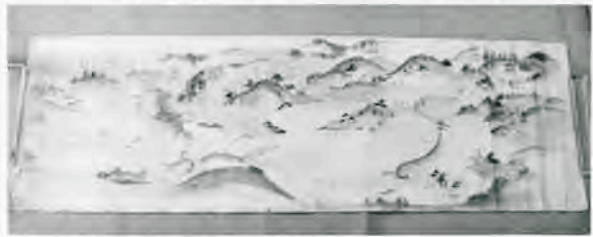
「江戸第一の植木屋」として、多くの業績を残した上駒込村染井の伊藤伊兵衛家について、その著作（『錦繡枕』・『地錦抄シリーズ』・『草花絵前集』）や、庭の絵図面（『武江染井翻紅軒霧島之図』）などから検討していきます。



武江染井翻紅軒霧島之図 館蔵

#### V 庭園都市江戸と駒込・巣鴨

江戸時代、江戸の広大な下屋敷として上駒込村染井にあった藤堂家（伊勢国津藩）下屋敷、および柳沢家（大和郡山藩）下屋敷（六義園）と駒込・巣鴨の植木屋たちとの関係について、江戸図（『懷宝御江戸絵図』須原屋茂兵衛板）・江戸切絵図（『尾張屋板』）や写真パネルを用いながら考えていきます。



六義園全図 東京都緑の図書室蔵

#### VI 園芸都市のゆくえ

大正期以降この地から次第に消えていった植木屋の行方について探っていくとともに、いまなお区内に数軒残る園芸業者の現状について、紹介していきます。

特別展開催期間中は、開館時間を午後五時一五分まで延長しています（通常は四時三〇分まで）。会期中多くの方々のご来館をお待ちしております。なお、特別展記念事業の実施については、八ページをご参照願います。（秋山）

#### 郷土資料館なんでもQ&A

**Q** 区内に徳川第一五代将軍の慶喜が住んでいたと聞きましたが、本当ですか。

**A** 本当です。徳川慶喜は明治維新の後に一時水戸に移り、さらに徳川家を継いだ田安亀之助（徳川家達）とともに駿府（静岡）に移ります。明治二年（一八六九）に謹慎を解かれた後も、ほぼ三〇年間その地にとどまりました。

慶喜が東京に移ってきたのは、明治三〇年（一八九七）の一月、六一歳の時です。そして、東京で最初に住んだ屋敷が巣鴨邸です。屋敷のあった場所は、現在のJR巣鴨駅から白山通りを渡った南西側の一画で、今ではビル街となっています。

慶喜がこの巣鴨邸に住んだのは四年間だけで、明治三四年（一八九一）の暮には、小日向第六天町（現文京区）の屋敷（地下鉄丸ノ内線車庫付近）に移ります。これは、池袋・田端間を結ぶ鉄道が明治三二年（一八九九）の五月に許可されたことから、その騒音を嫌ったこととされています。

静岡・東京時代の慶喜は、趣味に生きていたようで、特に写真に凝ったようです。慶喜が撮影した写真は、『将軍が撮った明治』（朝日新聞社）として刊行されており、その中に巣鴨邸の写真もありますが、今とはまったく違う景観に驚かされます。（小林）

連載 一点の資料から 《その6》 兵士の手紙／中国大陆から内地へ

今年も八月十五日が来る。

この日は一九四五（昭和二〇）年に太平洋戦争が終結した日であると同時に、八年間にわたる中国大陆での戦争が終わった日でもある。

今回紹介する資料は、一九三八（昭和一三）

年、日中戦争の最中に戦線の兵士から内地の親類へ送るために書かれた書簡である（写真1）。この兵士の書簡は五〇枚を越える数が本人の希望で残され、受取人のもとで大切に保管されていたものである。それらの葉書には本人が画

家志望であったことから、ある時は楽しげな、

ある時は悲壮感漂う挿絵が描かれている。

この書簡は、戦友の遺骨を首に下げた自画像に次のような文章が書かれている。

「南京へ／＼／その頃、無き戦友の遺骨を抱いて■■■■歩いた頃／顔も手も汗と埃りで／よこれ露営も火で／煤けこの世の人も／思えぬ顔してた頃／戦死した友が／『南京まではどんな／事があってもゆくん』だ』／  
 といったが不幸にも／激戦の犠牲となつてしまつたが／生前の言葉を  
 守つて南京まで抱いて／行きました。……  
 ……つまんない事だが……  
 ……／※十二月二十五  
 日雪の降る日書いて呉れた手紙一月十一日有難く拝見。／静かな只今の戦線には朝から低くたれた空から小雪がチラ／降つてゐます。／母上、斌君によろしく、無事、何れ又！／



写真1

1938. Jan. 12th. (「」は改行を示す)

この葉書には、消印も当局による検閲印もなかったため、実際に投函されたものか、折り目があるため他の書簡と同封したものか、除隊に際して自分で持ち帰ったものであるかは不明である。いずれにしても、描かれているのは南京へ向かう行軍中の自画像で、絵に添えられている日付は日本軍による南京大虐殺が引き起こされた一九三七年一月三日以後のものである。

それまで、むしろおどけた表情を多く描いていた（写真2）のが、この書簡では画風が一変している。この兵士は南京で、いったい何を見、経験したのであろうか。

なお、この兵士は一九三八年に除隊後、間もなく自殺している。（伊藤）



写真2

# 豊島区立郷土資料館からのお知らせ

## ★特別展記念事業開催のお知らせ

特別展「植木屋のある風景」の開催に伴い、左記のとおり記念事業を実施いたします。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

## ■特別展解説■（担当学芸員による展示解説）

八月七日（土）・八日（日）の二日間

時間は両日とも、①午後一時～二時、②午後三時～四時の二回ずつ実施。

※会場は郷土資料館展示室。事前の申し込みは必要ありません。直接会場へお越し下さい。

## ■記念講演会■

第1回 九月四日（土）午後二時～四時

演題…江戸・東京の園芸文化

講師…川添登氏（建築評論家）

第2回 九月一八日（土）午後二時～四時

演題…伊藤伊兵衛の活躍とその業績

講師…菊池勇夫氏（宮城学院女子大学教授）

第3回 九月二五日（土）午後二時～四時

演題…地下に眠る植木屋の生活（発掘調査の成果から）

講師…橋口定志氏（社会教育課文化財係学芸員）

※会場はいずれも勤労福祉会館4F会議室。参加希望者は、必ず郷土資料館まで電話にてお申し込み下さい（定員六〇名 申し込み先着順）。

## ★歴史講座「東京近郊の戦跡」開催のお知らせ

毎年夏に開催している戦争体験継承講座も今年で四年目になりました。今回は、近年開発とともに失われていく東京近郊にある戦跡の現状と保存について四回シリーズで考えていきます。

第一回 八月一日（日）《講演会》

八王子市中島飛行機地下工場跡の現状について

講師…齋藤勉氏（都立府中西高校教諭）

第二回 八月八日（日）《講演会》

東大和市給水塔・変電所の保存について

講師…富山稔子氏（東大和市の震災建造物の保存を求める市民の会会員）

第三回 八月二二日（日）《見学会》

横浜市旧連合艦隊司令部跡を見学する

講師…寺田貞治氏（慶応義塾高校教諭）

第四回 八月二九日（日）《講演会》

東京近郊の戦跡の現状（講座のまとめとして）

進行…当館学芸員

※時間はいずれも午後二時～四時。会場は勤労福祉会館4F会議室（見学会の詳細は講演会の時にお知らせします）。参加希望者（全回出席できる方）は、郷土資料館まで電話にてお申し込み下さい（定員四〇名 申し込み先着順）。

## 編集後記

長かった梅雨も終わりを告げ、〈日本の夏〉、〈資料館の夏〉の季節となりました。と、いうことで、郷土資料館では、特別展「植木屋のある風景―園芸都市〉の地域像をさぐる―」がまもなくオープンします。今回の特別展も、古文書あり、古典籍あり、植木鉢あり、植木屋の庭園の再現あり、写真パネルあり、と展示資料盛りだくさんです。会期中ぜひご来館下さい。

今号をもって、「特集 新館設立に向けて」の連続企画「収蔵庫探検隊が行く」シリーズが終了しました。次号からの新企画については、現在編集部内で喧々譁々（和気藹々ともいう）の議論が続いています。その結論は、「かたりべ32号」でご披露したいと思います。お楽しみに！

かたりべ  
No.31

1993年7月30日  
発行

豊島区立郷土資料館  
豊島区西池袋2-37-4  
電話03-3980-2351